

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第 59 号
2024 年 12 月

目 次

[2025 年度研究大会] 2025 年度研究大会企画について 荻部 直.....	1
研究大会プログラム (予定)	2
[書評] 〈クレオール〉の声を聴くアーレント思想へ——ed. by Marilyn Nissim-Sabat and Neil Roberts, <i>Creolizing Hannah Arendt</i> を読む 二井彬緒.....	4
[第 17 回日韓政治思想学会・共同学会議] 報告者募集のお知らせ.....	8
[会務報告] 2024 年度第 2 回理事会議事録	10

2025 年度研究大会企画について

研究企画委員会主任 荻 部 直（東京大学）

2025（令和7）年度、第32回の政治思想学会研究大会は、2025年5月24日（土曜）と25日（日曜）の二日間にわたり、東北大学（川内キャンパス、宮城県仙台市）にて開催される予定です。

すでに周知の事柄ですが、この政治思想学会に属する会員の研究分野は、地域に関しては西洋・日本・アジアなどさまざまであり、対象とする時代も、また研究手法も多岐にわたります。大学教授・大学院生の会員が属する学部・研究所・大学院研究科もさまざまですし、大学に属さずに研究を続けている会員も少なくはありません。

本学会研究大会のシンポジウムは、そうした多様な背景をもつ会員が一堂に会し、共通の主題に関して意見を闘わせ、最新の知見を交換できる機会です。そのため、研究分野をともにする会員が集う分科会を複数開催するという形は、とっていません。一つの統一テーマに即してシンポジウムを三つ開催するのが通例です。

そして三つのシンポジウムのいずれに関しても、西洋政治思想史、日本・アジア政治思想史、現代政治理論の三つの分野から報告者を集める形で企画するのが、この学会が発足して以来の慣例となっています。近年では、それぞれの分野で個別研究の蓄積が進んだ結果として、狭い意味での専門領域をこえて交流する機会が乏しくなっています。こうした状況のもとで、多くの分野の研究者がともに集い議論する本学会の研究大会は、意義のますます大きいものになっていると言えるでしょう。

そこで2025年度に関しては、「習俗の政治学」という統一テーマを選びました。政治思想とは、主として言葉を用いながら政治を考え、議論し、構想を書き記す営みです。しかし現実の政治においては、言葉によって意味を説明し尽くせるとは限らない、社会で共有された習俗、習慣、マナー

が、秩序の維持や更新に大きな役割を果たしてきました。それは人類社会のさまざまな地域・文化圏で見られる出来事であり、東西を問わず政治思想のテーマとなってきました。

シンポジウムⅠ「習俗の秩序形成力」は、この問題をいわば原論風に考察した思想として、18世紀フランスのジャン=ジャック・ルソー、徳川時代の儒学思想、20世紀におけるフリードリヒ・ハイエクとマイケル・オークショットをとりあげ、比較しながらその理論の意義を再考するものです。シンポジウムⅡ「政治理論の伝播と文化の差異」は、ある政治理論が、その生まれた文化圏を離れ、他の文化圏において受容されたさいに、いかなる変容と再生の過程が生じるか。これを広い意味での習俗の問題としてとらえ、18世紀の「均衡」概念、近代日本の国民道徳論、現代における関係的自律の理論と、三つの主題について議論します。シンポジウムⅢ「デモクラシーと習俗」は、現代の政治思想におけるもっとも重要な問題であるデモクラシーを考察するさいに、習俗との関係がいかに議論されてきたのか、もしくはどのように扱われるべきなのかを、西洋政治思想史、日本政治思想史、現代政治理論のそれぞれの視角から探ります。

「カスタム」「マナーズ」「シヴィリティ」、儀礼や風習、さらに地域の文化的伝統という形でとらえられてきた人間事象が、政治思想史において、また現代の政治理論において、どのように論じられ、いかなる構想が展開されてきたのか。さまざまな地域における思想史と、現代における理論の展開とをつき合わせながら、ともに議論しようと思います。

2025 年度政治思想学会研究大会プログラム（予定）

日程：2025年5月24日（土）・25日（日）

会場：東北大学（川内キャンパス）

統一テーマ：習俗の政治学

◆5月24日（土曜）

9：30～ 受付

10：00～12：40 シンポジウムⅠ：習俗の秩序形成力

司会：安藤裕介（立教大学）

報告：三嶋康平（東北大学）「ルソーの政治思想における「習俗」（仮）

大川真（中央大学：非会員）「歌舞と政治をめぐる思想」

松井陽征（明治大学）「自己生成的秩序の生成原理——ハイエクとオークショット」（仮）

討論：山岡龍一（放送大学）

12：50～13：50 休憩／理事会

13：50～15：30 公募パネル「関係的平等論と自律」

司会：田畑真一（北海道教育大学旭川校）

報告：阿部崇史・榊原清玄（東京大学）「労働の承認を問い直す——自己実現のための労働選択とベシ
ック・インカム」

宮本雅也（日本学術振興会）「リベラルな自律構想の再解釈——関係的視点と調和する解釈的自律
の可能性」

討論：大澤津（北九州市立大学）

15：40～18：20 シンポジウムⅡ：政治理論の伝播と文化の差異

司会：森川輝一（京都大学）

報告：上村剛（関西学院大学）「18世紀環大西洋の均衡概念」

杉山亮（東京女子大学）「邪説か異論か——国民道徳と党派性をめぐる諸問題」（仮）

石川涼子（立命館大学）「関係的自律の二つの顔」

討論：李セボン（成蹊大学）

18：20～18：40 総会

18：50～20：30 懇親会

◆5月25日(日曜)

9:00～ 受付

9:30～12:20 自由論題報告

第一会場

司会：重田園江(明治大学)

報告：

[9:30～10:20] 鎌田厚志(九州大学)「ヒューム政治思想における「自由の精神」の意義について」

[10:30～11:20] 鈴木元(東京大学)「『批判的所有権論』の生成へ——カント『人倫の形而上学』『法論』の政治思想史的分析」

[11:30～12:20] 上田恒友(東京大学)「ソレルの1793年憲法批判——反実証主義から神話へ」

第二会場

司会：朱琳(東北大学)

報告：

[9:30～10:20] 渡邊一貴(法政大学)「初期和辻哲郎における個人主義の確立と転回」

[10:30～11:20] 田得霖(名古屋大学)「近代日中間における「忠誠」論の思想的交錯——丸山眞男「忠誠と反逆」論の「前史」と「外伝」を中心に」

[11:30～12:20] 田中駿介(東京大学)「松下圭一と高島通敏における戦後革新運動をめぐる政治思想」

第三会場

司会：小田川大典(岡山大学)

報告：

[10:30～10:20] 石田雅樹(宮城教育大学)「デモクラシー、ポピュリズム、全体主義——ハンナ・アーレント「全体主義」論再考」

[11:30～12:20] 藤原拓広(九州大学)：「リベラル・ナショナリスト的国際秩序論の再検討」(仮)

12:30～13:40 休憩/理事会

13:40～14:00 総会

14:00～16:40 シンポジウムⅢ：デモクラシーと習俗

司会：苅部直(東京大学)

報告：高山裕二(明治大学)「『内面の自由』と習俗の変容——フランス・ロマン主義の政治思想の一断面」(仮)

須藤健一(京都大学博士)「〈過去の中にある現在〉、〈現在の中に実現されてある未来〉への視座——橋川文三の保守主義研究をめぐって」(仮)

乙部延剛(大阪大学)「文化のモダニズム的批判とデモクラシー」(仮)

討論：井柳美紀(静岡大学)

〈クレオール〉の声を聴くアーレント思想へ

—ed. by Marilyn Nissim-Sabat and Neil Roberts, *Creolizing Hannah Arendt* (Rowman & Littlefield Publishers, 2024) を読む

二 井 彬 緒 (東京大学)

1969年、ニューヨーク・ハーレム地区にあるマウント・モリス・パークには、スティーヴィー・ワンダー、ニーナ・シモンといった、黒人アーティストたちによる歌声が響きわたっていた。「30万人以上が参加したこの夏のコンサートシリーズの名は、“ハーレム・カルチュラル・フェスティバル”」(映画『サマー・オブ・ソウル』2021年)。開催地からハドソン川の方向に約40分歩くと、そこはかつてハンナ・アーレントが住んだ場所、リバーサイド・ドライブ370番地である。ハーレムから響く歌声はアーレントの元へ届いたのだろうか？

2024年、論文集*Creolizing Hannah Arendt*がRowman & Littlefield Publishersから出版された。編者は現象学、精神分析、文学を専門とするM・ニシム＝サバト(ルイス大学・哲学名誉教授)と、政治理論、アフリカ研究やクレオール研究を専門とするN・ロバーツ(ウィリアムズ大学・教授)である。本書の構成はイントロダクションと10本の論文からなり、ホロコースト研究者のR・イーグルストン、ハンナ・アーレント・センターの所長であるR・バーコヴィッツが名を連ね、アーレント研究者、脱植民地研究者、移民研究者など学際的な面々が寄稿している。刊行時にはS・ベンハビブがレビューを寄せ、高く評価した。

まず「クレオール化する」とは何だろうか。「クレオール creole」は第一義的には、とりわけ西洋による植民地化の時代以降に中南米植民地で生まれた人々のことを指す。ここから派生して「クレオール」は植民地現地で土着的・独自の発展した社会的な習慣や文化を指すようになった。特にカリブ海地域は原住民がいたところに西欧列強が黒人奴隷を連行し入植・定着させたため、先住民はほぼ絶滅させられているという歴史

的経緯がある。このため、カリブ海地域では現地の土着的な要素、黒人たちのアフリカ的な要素、宗主国のヨーロッパ的要素と、複数の文化が混ざり合う結果となった。したがって、「クレオール」は文化変容、文化の相互作用、多元性の側面と、さらに人種主義・植民地主義の負の遺産という側面が「混淆」した言葉なのである。

こうしたことから「クレオール化 creolization」とは、黒人奴隷またそれにルーツを持つ人々によって織りなされてきた、カリブそのものの土着性、カリブに由来しないアフリカとヨーロッパの要素、これら三つが接触、衝突することを通して相互に影響しあう、開放的かつ混合的なものへの志向、不純であることへの肯定を指すものである(中村達『私が諸島である』書肆侃侃房, 2023年, 100~110頁)。

では、なぜアフリカやカリブ海思想家をテーマとするのではなく、わざわざ西洋思想家であるアーレントをクレオール化して読む必要があるのか。この応答として本書の序文でニシム＝サバトとロバーツは、「クレオール化」における「開放性」を強調している。二人は本書の目的に、政治思想の規範——ヨーロッパを中心化し、ヨーロッパの外部を他者化して排除する——への異議申し立てを第一に挙げている。だがそれだけでは足りないという。ヨーロッパの内部と外部、宗主国と植民地、これらは対立の結果、必ずしも「分断」という「要塞化した終着点」つまり閉塞的な議論に行き着くのではない。支配のメカニズム、その影響などの負の遺産を明らかにしつつ、宗主国と植民地が接触と衝突を通してあらたな瞬間や出来事、あたらしい「はじまり」を創出してきたことを、改めて論じることが肝要なのだと言く。この本はたとえばハイチ革命など、アフリカやカリブ海、そのディアスポラたちによる奴隷制度か

らの解放、植民地解放、独立といった政治的自由を、その創設の意義を、現れを、アーレントを用いて評価・記録し、グローバルな議論として加えていくことを目指している。すなわち、アーレントを開いて読もうとするのだ。

どの論文も脱植民地化に向けた画期的な試みだが、ここでは本書の主張を凝縮している、ニシム=サバトによる「リトルロック考」における実存的現象学とクレオール化された思考」(第6章)のみ紹介したい。この論文は最近邦訳書も出たキャサリン・ソフィア・ベル『ハンナ・アーレントと黒人問題』への応答と言えよう(旧名キャサリン・T・ガインズ名義, 2014年出版。邦訳は百木漠・大形綾・橋爪大輝, 人文書院, 2024年)。ニシム=サバトは、アーレントが「リトルロック考」において黒人差別をおこなっている、という主張は誤りである、とする。

アーレントが黒人差別主義者だったとされる要因の一つとして指摘されるのが、次の点である。すなわちリトルロックのセントラル高校に黒人生徒が登校した際に起こった暴力を伴う差別事件において、黒人の子どもの親たちを、アーレントは「成り上がり者 parvenus」のように表現したことである。黒人の親たちは子どもの教育機会の均等化を通して、つまりは子どもを利用して、黒人自体の社会的地位を上げようとしたのではないかとアーレントが懐疑した点なのだ。ベルに言わせれば、学校での人種統合から噴出した黒人差別は白人側の問題である。それを、黒人側の落ち度にすり替えるアーレントの手つきこそ、まさに差別的である。ここからベルは米最高裁による教育機関における人種隔離の違憲判決(つまり統合の判決)にアーレントが反対したことを論証していく。ベルによる「アーレントは黒人の親を成り上がり者とみなした」という解釈は、E・ヤング=ブルーエルやベンハビブも各々の議論の中で指摘してきた点である。

だがニシム=サバトはこの解釈に反論する。まずニシム=サバトはアーレントが「リトルロック考」などの関連論考で「成り上がり者 parvenus」という言葉を一度も使用していない

こと、アーレントは黒人と白人の隔離に強く反対していたという事実確認を行なった上で、実存的現象学のアプローチから「人種統合に反対する暴徒の立場/黒人の母親の立場に立ったアーレントは何を考えたのか」を明らかにする。

アーレントは『全体主義の起原』で人種差別とモップを全体主義への潜在的な前兆としてみなした。リトルロックの学校統合の際に現れた、黒人の敵対者らは「嫉妬、嘲笑に満ちたモップ」とアーレントの手で記述されている。すなわち、この学校統合をきっかけとした暴徒の出現と拡大に、アーレントはアメリカの長期的な政治的脅威を見たのである。

アーレントは人種隔離には反対しても、統合の強制は危険だと考えていた。何の措置も準備もなく、差別意識を持った白人による環境に黒人を迎えるのは危険であり、ひいては人種差別による暴動をアメリカ全土で引き起こす可能性があるとしてアーレントは考えた、とニシム=サバトは指摘する。黒人を嘲笑う暴徒は、アメリカ社会における最高裁判決を否定する(人種隔離を望む)議論の高まりを映し出していた。性急な統合は、結果的にこうしたレイシストたちの議論を拡大させ、世論を支配させてしまう可能性がある。要するにアーレントはバックラッシュを危惧していた、とされるのだ。

実際、アフーマティブ・アクションがバックラッシュを惹起することは多く指摘されてきた。黒人が「優遇」され、機会が損なわれるのではないかと「下方嫉妬」(山本圭『嫉妬論』光文社新書, 2024年)する白人が出てくる。「黒人」の部分は同性愛者、トランス、女性、在日コリアンなど他にも置き換えられる。

この上でアーレントは黒人の母親の立場を思考する。ニシム=サバトが注目するのは、ベンハビブによる「リトルロック考」の「拡大された心性」——他者の立場になって思考するという判断力論の概念の一つ——を用いた解釈である。ベンハビブによれば、リトルロック事件の際にアーレントは黒人の母親の立場になって思考している。つまり「拡大された心性」を実践し、結果として

アーレントは黒人の親を「成り上がり者」として理解した、とするものである。

ニシム＝サバトはベンハビブの解釈を踏まえつつ、アーレントはこの「拡大された心性」の実践対象を、学校統合に反対する暴徒にもあてはめていたのではないかと指摘する。統合に反対した暴徒は主に白人である。自らの立場が黒人たちによって削り取られ、さまざまな機会を奪いとられるのではないかと。そうした暴徒の論理は、いうまでもなく差別による反応である。しかし、暴徒によるヘイト行動を抑えることは容易ではない。

一方で黒人の母たち、もう一方で暴徒、この異なる二者の立場を考慮したうえで、差別と分断の空間に子どもを巻きこむべきではない、とアーレントは判断したのではないかと。ニシム＝サバトはそう論じる。いずれにしてもこの問題における根源的な原因は最高裁の強制的措置と政府の不十分な対応にある。それゆえアーレントは、強制的な統合の義務化の前に人種隔離を叫ぶ世論に耐えうるような、人種統合したモデル校の設立を提案した、とニシム＝サバトはいう。

この論考でニシム＝サバトが強調するのは、アーレントの思考・判断力論における「拡大された心性」という概念を、現実政治と架橋的思考に向けて解釈することである。差別による不均衡や分断があり、それを解消するため、架橋するための非暴力的な手段を考える際、いかなる選択がベストなのかを異なる複数の立場から判断する。そうした潜勢力がアーレント思想にある、とするのだ。

ニシム＝サバトの論点とは、アーレントを黒人差別主義者という固定化された視点だけではなく、アーレント思想が黒人と白人の分断に対応するための思想的枠組を提供していることに目をむけることである。とはいえ『全体主義の起原』におけるブラック・アフリカに対する差別的なまなざしを思うと（高橋哲哉『記憶のエチカ』岩波書店、2017年）、なぜアーレントはアメリカにおける人種統合には賛成できたのだろうか？なぜ、パレスチナを含む地中海・ヨーロッパ地域の連邦創設を論じた際に、アフリカ南部を排除したのか？

アーレントが植民地主義や人種主義から完全に自由な思考をしていたとはいえない。

本書の議論に補足するとしたら、アーレントをクレオール化ないし脱植民地化するならば、なによりも先住民問題つまりアメリカ革命における隠蔽された暴力である、ネイティブ・アメリカンへの沈黙に向き合わねばならない。この関連で言えば、A・セゼール、E・グリッサン、A・ンベンベ、P・シャモワゾーらは、イスラエルによるパレスチナ占領およびイスラエルを擁護する西欧の議論を長年批判してきた。アーレントとイスラエル／パレスチナについて論じる時、こうしたクレオール研究の、植民地支配と奴隷制というトラウマの記憶とともにアーレントを読解することも必要になっていくはずだ。さいわい、カリブ海・アフリカ思想・文学について日本語で読める研究書・翻訳も年々増えており、こうした議論に触れるための学術的環境は充実している。筆者も本書を読む上で、星埜守之、河野哲也、中村隆之、福島亮、ファヨル入江容子、中村達の研究や議論に非常に助けられた。

本書をアジアで読むことの意味も重い。人種問題はアジアに生きる有色人種の私たちにとっても他人事ではあり得ない。国内でアーレントと脱植民地化を論じるには、日本の過去における東アジアの植民地支配の歴史とその責任——沖縄やアイヌも含めた——を思考しつづけることもまた、引き続き大きな課題となろう。

同時に、本書が掲げる、人種的・植民地主義的対立を解決し、両者のより持続的な対話や政治的関係性の構築をアーレントから論じる、という指針に、筆者は強く賛同したい。アーレントが「人種統合したモデル校の設立を提案した」という点は、パレスチナにおいてパレスチナ民族とユダヤ民族混合の地域評議会の創設を説いた彼女の像とも響きあう。

冒頭で紹介したハーレムの音楽祭には、人種・ジェンダー混合のドゥーワップバンド、スライ&ザ・ファミリー・ストーンも出演した。スライが歌ったのは人気ナンバー「Everyday People」である。人種をはじめとしたあらゆる差別に反対す

る歌詞にはこうある——「民族も違えばやり方も違う、(それでも) うちら一緒に生きていくっじゃない (we got to live together)」。スライの歌詞は不思議にもアーレントの共生 (live together) の思想と呼応する。今後、アーレントを読解する上で見据えるべきことは、分断を超克するためにアーレントを読むことなのだろう。アーレント思想の内的な人種主義を批判し、それをアーレント思想によって流用することで超克していく——地上という限られた場所で「うちら一緒に生きていく」ために。本書はその道筋を照らしてくれている。

付記：執筆にあたり福島亮氏（エメ・セゼール研究）からアドバイスを受けた。記して感謝したい。本稿に不備がある場合は無論、執筆者の責任である。また本稿はJSPS科研費 23K18599 による研究成果の一部である。

第17回日韓政治思想学会・共同学術会議(韓国・ソウル)への学会派遣 報告者募集のお知らせ

2025年11月21日～23日、韓国・ソウルで開催される第17回日韓政治思想学会・共同学術会議(Japan-Korea International Joint Conference for the Study of Political Thought)に、政治思想学会から派遣する報告者を1名、募集します。

日韓政治思想学会は、韓国政治思想学会と政治思想学会が共同で開催している国際学術会議です。この募集は、将来における政治思想研究を中心とした日韓学術交流のさらなる発展を目指し、両学会間の若手研究者による交際を主眼としたものです。

第17回共同学術会議の共通論題は、「言葉と暴力の政治」です。

使用言語は、日本語(ならびに韓国語)です。日本語と韓国語の同時通訳がつかます。

1. 日程と場所

①2025年11月21日(金曜日)に韓国・ソウルに入り、同日夕刻に開催される歓迎会に出席します。共同学術会議は、翌22日(土曜日)に、一日かけて開催されます。23日(日曜日)に帰国となります。

②韓国・ソウルで開催されます。会場は、後日、政治思想学会のHPで発表します。

2. 応募資格

①政治思想学会の会員。

②報告の内容が共通論題と関連性を持つ限り、研究の対象分野は、とくに問いません。

(決して、東アジア・日本政治思想史、日韓関係、韓国政治などに限定されるものではありません)

③応募時点で政治思想に関する研究歴が15年程度までの会員を対象とします。

3. 共同学術会議への参加について

①派遣が決定した者は、第17回日韓政治思想

学会共同学術会議において、研究報告を行うことが義務づけられます。

②報告者は、11月21日の夕刻より開催される歓迎会や、会議当日の懇親会など、会議に関わる全行程に参加してください。

③会議では、自らの報告とともに、他のセッションの司会や討論者などを担当する場合もありますので、あらかじめご留意ください。

④派遣が決定した者は、2025年8月31日までに、8000字前後の報告原稿(フルペーパー)を提出してください。

原稿はその後、韓国語に翻訳され、共同学術会議において報告資料として配付されます。

4. 費用

①航空券は、70,000円を上限として政治思想学会が負担します。飛行機に座席種別がある場合は最も低いランクの座席を使用し、可能な限り低廉な割引料金を利用することとします。具体的な規定は事務局の判断によるため、チケット購入の前に事務局と相談してください。また領収書とチケットの半券を、必ず事務局に提出してください。

②大会期間中のホテル代(2泊)は、韓国政治思想学会が負担します。

③自宅から空港までの往復の交通費、ならびに韓国到着後、会場までの往復の交通費、歓迎会費や懇親会費などは、支給されませんので、各自で負担してください。

5. 応募手続き

①応募者は、A4用紙に横書きで以下の事項を記入した電子ファイルを、Eメールに添付して、担当の大久保健晴理事(tokubo@keio.jp)に送付してください。ファイルは、Microsoft WordかPDFの形式でお願いします。

- (1) 応募者の氏名、生年、所属、身分、連絡先
- (2) 報告の題目、ならびに要旨(2000字以内)

②提出の際、件名欄に「2025年度日韓政治思想学会報告者公募」と明記してください。

③締切日 2025年3月31日23時59分まで (必着)

④書類を受領後、3日以内に、応募者に受領確認のメールをお送りします。もし万が一にも受領確認のメールが届かない場合は、大久保健晴理事ないし学会事務局までお問い合わせください。

6. 審査手続き

①レフリーによる審査を経て、2025年4月20日までに、その結果を応募者に通知します。

7. 注意事項

①交通費、および滞在費に関して、他の組織や所属機関等から同様の給付を二重に受けることを堅く禁止します。こうした二重給付の事態が生じないように、応募者は留意してください。

②実施の具体的過程や支給額等については、最終的に事務局が判断することとなります。チケットの購入に際しては、予約前に事務局と相談の上、手続きを進めてください。

8. 問い合わせ先

①その他、質問やご不明な点などございましたら、政治思想学会・国際交流委員（日韓担当）の大久保健晴理事（tokubo@keio.jp）にお問い合わせください。

以上

2024年12月20日発行 発行人 安武真隆 編集人 川上洋平

政治思想学会事務局 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学法学部 山本圭研究室内

E-mail: jcsptoffice@gmail.com

会員業務（退会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送）

（株）アドスリー 〒162-0814 東京都新宿区新小川町5-20 サンライズビルⅡ3F

Tel : 03-3528-9841 Fax : 03-3528-9842

学会ホームページ : <http://www.jcspt.jp/>